

奈良・興福寺旧境内（賤院地区）

- 1 所在地 奈良市登大路町
- 2 調査期間 一九八六年（昭和61）八月～一〇月
- 3 発掘機関 奈良県立橿原考古学研究所
- 4 調査担当者 井上義光・中井一夫
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（奈良）

平城京外京の北東隅部に所在する興福寺は、藤原氏の氏寺として繁栄していたが、現在は主要伽藍を残すのみで、他の地域は官公庁や公園となっている。

昭和六三年に開催が予定されている「なら・シルクロード博」の施設の建設がこの地に予定されたことに對して、地下遺構を保存するための資料を得るため調査を行なった。調査地域は宮本長二郎氏の境内復元に

よると賤院地区とされている所で、二間×一三間以上の東西棟の掘立柱建物が南北に二棟ならんで検出された。この二棟の間には、一〇世紀代に廃棄された井戸があり、この内より量は少ないがフイゴの羽口などが出土したことから、こうしたものを使った作業がこの地域でおこなわれていたことがうかがわれる。

木簡が出土したのは、この東西棟の建物の柱掘形を破壊して作られた井戸で、径約四mの規模をもつと考えられる。調査で検出したのは、このうちの四分の一のみで他は調査地区外である。本来素掘りの井戸であったのか、井戸枠が抜き去られたものであるのかは、掘形壁の破壊がはなはだしく、また断面形が袋状を呈していたため、上面から約二mの深さまでしか調査できず、はっきりさせられなかった。井戸内は、廃棄後に投棄された灰の層で満たされていたが、この中に縞状に若干の土器、木片等を含む粘質土が入っていた。全体的にこれらはレンズ状の堆積をしていた。こうした堆積土中より木簡を一括して検出した。他の遺物は少なく、時期決定はむずかしいが、一四世紀代ないしは一五世紀代頃と思われる。瓦器片がみられないことから一五世紀代の可能性が高い。

8 木簡の積文・内容

出土点数は二九〇点にもおよぶ。数点の笹塔婆をのぞけば、そのほとんど全てが、頭部を圭頭状にし、經典を書写したこけら経である。完形のもの比較的多く、それらは二一・五cmと二五cm前後の

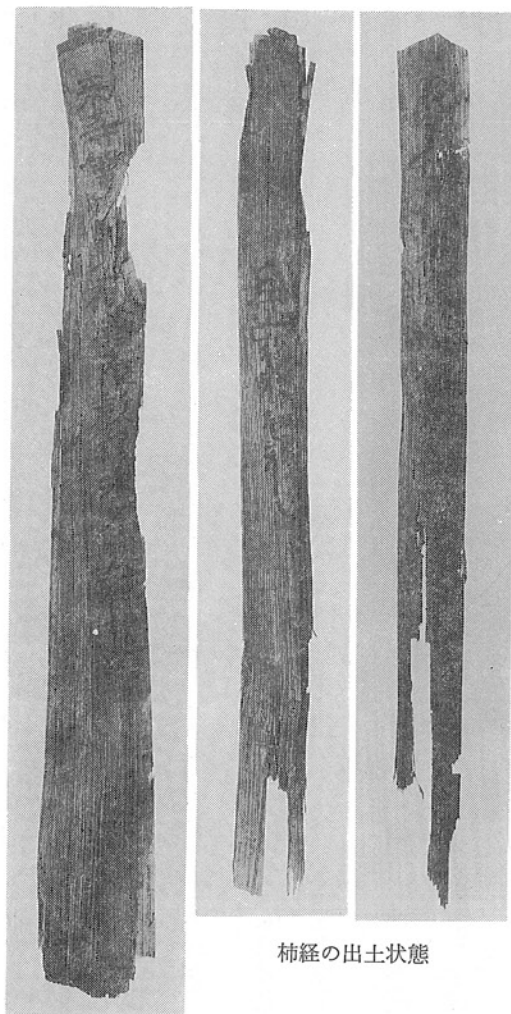
二グループに分類できそうである。全て檜の薄片で墨痕は明瞭であるが、十数枚がくっついて出土したため、他片に文字がうつり、判読に苦しい場合もあった。出土点数が多く整理中であり、検討すべき問題も多いので、詳細は報告書に譲りたい。ここでは代表的なものの釈文を示し、問題点を指摘するにとどめる。(最下段のカッコ内は出土番号)

- (1) 「地蔵菩薩本願經灯利天宮神通品第一」
(281) × (14) × 1 061 (130)
- (2) 「如是我聞一時仏在灯利天為母說法今時」
(213) × (13) × 1 061 (129)
- (3) 「十方無量世界不可説不可説一切諸仏及」
(216) × (14) × 1 061 (128)
- (4) 「大菩薩摩訶薩皆來集會證歎釈迦牟尼仏」
・「此世界他世界此国土他国土如是□來集」
(216) × (16) × 1 061 (127)
- (5) 「能於五濁惡世現不可思議大智慧□□之」
・「摩訶薩沙觀是一切諸仏菩薩及天龍鬼」
(214) × (15) × 1 061 (126)
- (6) 「力調伏剛□□衆生知苦樂法各遣侍者問訊」
・「今時釈迦牟尼仏告文殊師利法王子菩薩」
(214) × (16) × 1 061 (125)

- (7) 「世尊是時如來含笑放百千萬億大光明雲」
・「大愛敬鬼鬼王如是等鬼王皆來集會」
(209) × (16) × 1 061 (124)
 - (8) 「所謂大円満光明雲大慈悲光明雲大智慧」
・「王行病鬼王□□鬼王慈心鬼王福利鬼□」
(217) × (17) × 1 061 (123)
 - (9) 「光明雲大般若光明雲大三昧光明雲大吉」
・「惡目鬼王敢血鬼精氣鬼王敢胎卵鬼」
(216) × (16) × 1 061 (122)
 - (10) 「地蔵菩薩本願」
・「南無地蔵菩薩」
90 × 22 × 1 061 (1)
 - (11) × □ 一卷十二決 □ 明日十三日 頓写布施六十一 ^{〔畢カ〕}
(213) × (14) × 1 061 (106)
 - (12) 「今時大□智□如來受十方諸梵天王及十」
三十一
256 × 16 × 1 061 (204)
- (1)に「地蔵菩薩本願經」、(10)に「地蔵菩薩本願」とみえることを手がかりに、一部、こけら經の配列を復元することができた。それは(1)～(9)の部分で、「地蔵菩薩本願經」(上下二卷、『大正新脩大藏經』第三卷七七～七九〇ページに収める)の巻首と、「忉利天宮神通品第一」である。
- 元興寺極楽坊のこけら經(卒塔婆經とも)は、本堂(曼荼羅堂)の解

体修理時に天井裏などから発見されたもの、境内各所の発掘により発見されたものなど、およそ三万五千本余あり、そのうちには二〇本で一把のもの、二〇本一把とはならないが明らかにセットとなっているもの、などに分類されている（『日本仏教民俗基礎資料集成六、元興寺極楽坊Ⅳ』中央公論美術出版 昭和五〇年）。

(1)～(9)は密着し一塊りとなって出土したものの一部であり、復元すると二〇本で一把であった可能性が大きい。(1)～(3)は表面のみに書写しているが、(4)～(9)は表裏ともに経文がみえる。釈文の配列および表裏の判断は、復元結果にもとづく。



柿経の出土状態

地藏菩薩本願經卷上⁽¹⁾

唐于闐国三藏沙門実叉難陀訳

切利天宮神通品第一

如⁽²⁾是我聞。一時仏在切利天。為母說法。余時十方無量世界不可説不可説一切諸仏。及大菩薩摩訶薩。皆來集会。讚歎釈迦牟尼仏能於五濁惡世。現不可思議大智慧神通之力。調伏剛彊衆生。知苦樂法。各遣侍者。問訊世尊。是時如來含笑。放百千萬億大光明雲。所謂大円満光明雲。大慈悲光明雲。大智慧光明雲。大般若光明雲。大三昧光明雲。大吉——（この後、三三二字省略）——惡目鬼王。噉血鬼王。噉精氣鬼王。噉胎卵鬼王。行病鬼王。攝毒鬼王。慈心鬼王。福利鬼王。大愛敬鬼王。如是等鬼王。皆來集会。余時釈迦牟尼仏告文殊師利法王子菩薩摩訶薩⁽⁵⁾。汝觀一切諸仏菩薩。及天龍鬼神。此世界他世界此国土他国土。如是今來集会到切利天⁽⁴⁾。

（後略）

途中省略した部分は、こけら経一〇本に表裏ほぼ一七字を配したと仮定すれば、はじめの三

本をあわせて、計一九本と推測できるだろう。さらに巻首の一本に続いて、「唐于闐国三藏沙門実叉難陀訳」と記す一本があったとすれば（裏面はなし）、合計二〇本で一把握であったと推定できる。

元興寺のこけら経では、二〇本一組の根元をこよりでゆわえた例がある。扇面のように広げて読経し、表が終れば裏返して読んだらしい。本例ももとはこよりでゆわえられたまま、放棄されたものと推測される。

(11)はこけら経写経に関わるものである。また「×七月廿四日 地藏講経 加賀公分」とするものがあり、こけら経の写経や転読にかかわる内容をもつ。

(12)は経典名を把握していないが、下部の「三十一」は、例えば三卷の十一番目というように、こけら経の順序を示したものと解される。元興寺にも同様の例がある。本遺跡のこけら経にも、ほかに「地上 四」と下部に記すものがあり、「地藏菩薩本願經上卷」の第四番目の意味かと思われる。

(13)は五輪塔状に左右側面を刻んだ笹塔婆である。以上に示したもののほかに、五輪塔の絵、僧侶の顔、烏帽子をかぶった武士の横顔を細筆で描いたものなどがある。地中から出土したこけら経としては残りのよいものであり、木簡学の立場からも種々の考察が可能であろう。

(1)~(7) 中井一夫、8 和田萃

奈良・藤原京跡

- 1 所在地 奈良県橿原市木之本町
- 2 調査期間 一九八五年（昭60）二月～一九八六年八月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 岡田英男
- 5 遺跡の種類 宮殿・官衙・都城跡
- 6 遺跡の年代 七世紀末～八世紀初頭
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

香久山の西麓において一九八五年の第四五・四六次調査に続いて第四七・五〇次（西）調査を行った。第四五・四六次調査地を合わせた総面積は二〇〇〇㎡で、ほぼ藤原京左京六条三坊の東北坪と東南坪に当たる。このうち第四七・五〇次（西）調査地は六条三坊の中心部および東北坪西南部に当たる。両調査地は東西に接しており、面積は合わせて四〇〇〇㎡である。

第四五次から第五〇次までの調査の所見を簡略に述べると、遺構は古墳時代から室町時代までであり、そのうち藤原宮期はA・B二期に大別できる。

A期は道路と区画の塀を中心とした時期で、東三坊坊間路、六条条間路、坪の周囲を限る塀、坪を東西あるいは南北に二分する塀な